

詩文にみる西湖の変遷

序

象潟や雨に西施がねぶの花

芭蕉の『おくのほそ道』に載せる一句である。人口に膾炙するこの句が蘇東坡（一〇三六—一一〇一）の次の詩に基づくことはよく知られている。

飲湖上初晴後雨 湖上に飲し初め晴れ後に雨ふる

水光激灑晴方好 水光激灑として晴れて方に好し

山色空濛雨亦奇 山色空濛 雨も亦奇なり

欲把西湖比西子 西湖を把って西子に比せんと欲すれば

淡粧濃抹総相宜 淡粧 濃抹 総て相宜し

棟方 徳

詩中の「西子」とは芭蕉の句にある西施のことで、春秋時代に生きた中国の代表的な美人である。つまり、蘇東坡は西湖という地名の「西」と美人である西施の「西」とを掛けて洒落たのである。初めに挙げた芭蕉の句は、この句のみを見てその意味を判断するのは難しいが、句の前に、「汐風真砂を吹上、雨朦朧として鳥海の山かくる。闇中に模索して雨も又奇也とせば、雨後の晴色又頼母敷と蟹の苦屋に膝をいれて、雨の晴を待つ。」とあることから、芭蕉が雨に煙る象潟の風景と西湖の詩のイメージとを重ねて句を詠んだことが明らかになる。

蘇軾の詩は、西湖を詠んだ数多くの詩の中でも、おそらくは最も人々に知られていたもので、芭蕉が雨の日の風景から西湖を連想したのも、決して唐突なものではなかったものと思われる。西湖は浙江省杭州市にある湖で、その風光明媚な姿が古来多くの文人に感銘

を与え、ここを訪れた文人は様々な詩文を残している。西湖が初めて詩に詠まれてから今日まで、湖の実際の風景は時代によってその姿を変えているのだが、この地で作られた詩文を読むと、その作品に描かれた西湖の姿もまた変化していることに気が付く。本論では、西湖の風景の変化とそれに伴う詩文の変化を確認し、その変化が何故起ったのかを探っていききたい。

一 西湖の歴史とその景勝

まずは、西湖の湖畔に発達した杭州の歴史を確認してみたい。もともとこの地は錢塘江の大きな河口であった。錢塘江が上流から運んでくる土砂が河口附近に堆積され、しだいに大きな湿地帯を造り上げたのである。⁽¹⁾

呉越が南方の覇を称えていた春秋時代、この地は越の国に属していたが、いまだに湿地帯に過ぎず、西湖は存在していなかった。秦の始皇帝の時代にはここに錢唐県が置かれ会稽郡に属した。『史記』の、始皇帝が南方を巡遊した際の記述に「丹陽を過ぎ錢唐に至り、浙江を臨む。波悪く、乃ち西百二十里の狭より渡る」とあるが、これが西湖のある杭州が文献にあらわれる最初である。漢、三国、東晋を経て南北朝になると県制に代わって郡制が敷かれ、錢唐郡と称

された。

隋になると多くの運河が切り開かれ、この地までの交通はしだいに容易になり、人々の往来が激しくなる。地名も初めて杭州と呼ばれるようになる。次の唐代の初期には人口は十万を越え、都市と称するに相応しい体裁を備え始める。特に都市の発展に貢献したのは大歴年間に刺史として赴任した李泌^{りひつ}である。もともと河口であったため、杭州の水は塩分が多すぎて飲用には適していなかった。そこで彼は新たに六つの井戸を掘り、さらに西湖の水を城内に引いたのである。これによって住民は初めて飲み水に欠くことはなくなり、人口もさらに増加した。長慶二年（八二二）、白居易（七七二—八四六）が赴任して、治水事業に力を入れ堤を築いて景観を整えたため、杭州は西湖という美しい湖を備えた土地として人々に知られることとなった。これ以降、杭州という都市と西湖とは切り離すことのできない関係となる。

北宋代には再び汚泥が西湖に溜まり湿地帯に戻ってしまい、そこに附近の農民が菰を栽培しはじめ、景観は失われようとしていた。蘇軾はそれを惜しく思い、湖を浚渫し泥を積み上げ、湖を南北に分断する堤を築いた。これが蘇堤と呼ばれる長堤である。

南宋になると、この地は行在所が置かれ臨安と称するようになる。とはいえ、北方の地は回復が容易ではなかったため、実際には都と

言つてよいだろう。この遷都によって、北方に住んでいた人々も移住しはじめ、杭州はますます大都市として発展するのである。人口は百五十万を越えていたともいう。これ以降、西湖は荒廃と復興を何度か繰り返すのだが、今は美しい景観を保ち続けている。

中国人ならば誰でも知っている言葉に「上には天堂有り。下には蘇杭有り」がある。蘇州・杭州は天国にも比するほどの理想郷であるという意味である。杭州がこれほど讚美されるのは、もちろんその傍らに西湖を備えているからであるが、それほどまでに人々のあこがれの対象となっている西湖の景観とはいったいどの様なものであろうか。

西湖の面積はおよそ六平方キロメートル、深さの平均は一、五メートルに過ぎない。ほぼ円形の湖は決して大きいとは言えず、どの方向からも対岸が見えないほどの距離はない。しかし、その程良い間隔が景観を美しく見せるのに役立つ。きらめく水面や岸辺の柳を近景とし、遠景としての対岸の山々は、晴れ渡った日には眼前に迫り、雨や霧にけぶる日には薄墨を刷いたかのように微かに見え隠れする。天気によって大きな変化を見せるのである。湖のほぼ中心には小瀛洲、湖心亭、阮灘の三つの島が静かに浮び、島の西には柳が風に揺れる蘇堤が南北に連なり、北には孤山と呼ばれる小さな島が湖の中に突出し、そこから東に向つて白堤が伸びている。湖の

東側は街が広がり、三方はぐるりと青い山々に囲まれている。つまり、どこから見てもこの湖は単調な景色は存在せず、しかも、四季折々朝夕一瞬たりとも同じ風景はない。いわば西湖は大きな庭園と言つてよいだろう。

以上が西湖の沿革と景観の概観である。次に、この地を題材とした作品を時代順に見ていきたい。

二 六朝の西湖

杭州を題材とした文学作品で、比較的早い時期のものは、南朝齊の「錢唐の蘇小の歌」だろう。蘇小とは妓女である蘇小小のことで、一説に晋の人ともいう。

妾乗油壁車 妾は乗る油壁車

郎騎青驄馬 郎は乗る青驄馬

何処結同心 何れの処にか同心を結ぶ

西陵松柏下 西陵 松柏の下

第三句の「結同心」とは紐の結び方だが、相手と心を結ぶ意味をかけている。第四句の「松柏」は季節によつてもその色を変えない

豊かにし、さらに堤を築いた。おかげで、その景観も一層美しくなつた。

春題湖上

湖上春来似画図	湖上	春来りて画図に似たり
乱峰圍繞水平鋪	乱峰	圍繞して水平らかに鋪く
松排山面千重翠	松は山面に排す千重の翠	
月点波心一顆珠	月は波心に点ず一顆の珠	
碧毯線頭抽早稻	碧毯の線頭	早稻を抜き
青羅裙帯展新蒲	青羅の裙帯	新蒲を展ぶ
未能抛得杭州去	未だ杭州を抛ち得て去る能わず	
一半勾留是此湖	一半	勾留するは是れ此の湖

首聯では大きな風景の全景を描く。頷聯は遠景、頸聯は近景。尾聯では、自分が杭州を去りたい理由の半分はこの美しい西湖のためなのだ、西湖に心引かれる心情を述べる。彼はこのほかにも西湖を題材とする多くの詩や詞を作っている。「最も湖東を愛し行けども足りず、緑楊陰裡 白沙堤」(錢堤湖春望)、「余杭の形勝は四方に無し、洲は青山に傍い県は湖に枕む」(余杭形勝)、「处处頭を回らせば尽く恋うるに堪えたり、就中別れ難きは是れ湖辺」(西湖

留別)、「江南を憶う、最も憶うは是れ杭州」(憶江南)など、どの句からも、彼の並々ならぬ西湖への愛着が感じられる。

盛唐以前、杭州は中国全土に知られていた場所ではなかった。ましてや、ほとんど湿地帯に近かった西湖は、その存在も知られていなかった。その西湖を天下に知らしめた白居易の貢献は大きい。唐代にはその後も、姚合、羅隱など何人かは西湖を謡う詩人はいたものの、白居易ほど西湖に魅了された者はいなかった。

四 宋代の西湖

北宋の初め、西湖が気に入入り、湖に浮ぶ孤山に住み込んだ文人がいた。林逋(九六七—一〇二八)である。彼は孤山に梅を三百本植え鶴を飼っていたので、人々は彼のことを「梅を妻とし鶴を子とする」と言った。今も孤山に建てられている放鶴亭は彼のこの言い伝えに基づいて付けられた名である。この詩人は日本人には林和靖りんなせいという号で親しまれている。彼の「山園小梅」の句は特に有名である。

疎影橫斜水清淺	疎影橫斜	水清淺
暗香浮動月黃昏	暗香浮動	月黃昏

「斜めに差込むまばらな梅の枝が清らかに浅い水に映じ、何処からともなく漂ってくる梅の香は、たそがれの月に揺らめいている」という意。梅を描いた詩の中でも、最高の傑作であると評価されるが、これが西湖のほとりで詠まれたからこそ人々に愛唱されたのであろう。

蘇軾は白居易以上に多くの西湖の詩を残している。彼は王安石（一〇一九—一〇八六）と対立し、自ら外任を希望し、熙寧四年（一〇七二）六月、通判として杭州に赴任した。当時、西湖は菰が生い茂り、西湖の水位は低くなっていた。蘇軾はさっそく湖底の泥を浚渫し、湖を南北に貫く堤防を築き上げた。これが今も名勝の一つとなっている蘇堤である。これによって西湖はさらにその美しさを増すことになった。

六月二十七日望湖樓醉書五絶其五 六月二十七日 望湖樓

醉書五絶 其の五

未成小隱聊中隱 未だ小隱を成さず 聊か中隱

可得長間勝暫間 長間の暫間に勝るを得べけんや

我本無家更安往 我は本家無し 更に安くにか往かん

故郷無此好湖山 故郷 此の好湖山無し

一般的に言って故郷を出て他郷に住む者は、故郷の風景をどこよりもすばらしいものと感ずる。そんな故郷より勝ると言うのだから、蘇軾の西湖に対する思い入れは想像できよう。尚、起句に見える「中隱」とは、官職に就きながら隱棲することをいう。この言葉は、白居易が唱えた生き方であった。白居易の「中隱」と題する詩に「如かず中隱となりて、隠れて留司の官に在らんには」とある。蘇軾は自分と同様この地に赴任した白居易の句をふと思いついたのかもしれない。

本論の最初に挙げた蘇軾の「湖上に飲し初め晴れ後に雨ふる」に、

欲把西湖比西子 西湖を把って西子に比せんと欲すれば

淡粧濃抹総相宜 淡粧 濃抹 総て相宜し

とあるが、これが西湖を女性に喩えた最初である。女性に喩えられることによって西湖は息吹きを開始し生命力が与えられることになる。つまり、愛の対象として見るものが始まったのである。これ以降、西湖は西子湖とも呼ばれ、後の観光案内書では西湖を「彼女」と呼ぶようになる。

南宋になると、事実上、杭州が首都となったため、官僚たちは皆この地に移り住むこととなった。中国では、官僚イコール文人であ

るため、西湖を題材とする作品も当然多くなる。奇抜な語句を用いた楊万里（一一二四—一二〇六）、一万首もの詩を残した陆游（一二五—一二〇九）、田園詩人である范成大（一一二六—一九三）、憂国詞人辛弃疾（一一四〇—一二〇七）なども争うように西湖を詠み、西湖の名を中国全土に広めた点で貢献したが、西湖に遊ぶ楽しさを謡うことが主題であることが多く、西湖自体には特に取り立てるべき変化はない。これ以降の西湖を描いた詩文は、以上の詩人たちの模倣とは言わないまでも、先人の作をかなり強く意識した表現が多くなる。こうした状況について大室幹雄氏は次のように述べる。

つまりそれぞれに構えた視覚から、西湖の風景の時間的でも空間的でもある情景を彼らが見てとり詩文に写すと、それを読んだ人たちがそれに追従して、同じ情景を同じ視覚から眺めることを愛好することになる。⁽²⁾

これは、ちょうど、今の団体旅行に参加する大部分の人たちのように、写真で見た風景や、書物や噂で知った場所に行き、まちがいはなくその風景が存在することを確認し、記念写真を撮ることで満足するといったようすと似ている。西湖を訪れる文人たちが、これと同じような感覚で詩文を作るとしたら、本当に個性ある作品を創り出すことは難しいと言わなければならぬ。

南宋の祝穆の撰になる『方輿勝覧』に、はじめて「西湖十景」が

みえる。すべて挙げると「平湖秋月」「蘇塘春曉」「断桥残雪」「雷峰落照」「南屏晚鐘」「曲院風荷」「花港觀魚」「柳浪聞鶯」「三潭印月」「両峰挿雲」である。この中の「雷峰落照」と「両峰挿雲」は、清朝にそれぞれ「雷峰夕照」と「双峰挿雲」とに換えられ、今に至る。西湖の美しさを代表する四字としては、他に名付けようがないほど洗練された名称であり、実際の風景と名称とを照らし合せると、どれもなるほどと思わせる表現である。これら特定の風景地の呼び名ができるということは、西湖が多くの人に親しまれ愛着をもたれていることを表わしているだろうが、実は風景鑑賞の定型化が進み、観光地化されてしまったことをも示している。

五 元・明の西湖

南宋が終り、元の時代になると『都城紀勝』『西湖老人繁勝録』『夢梁録』『武林旧事』といった、西湖に関する書が揃って作られた。これらのほとんどが、西湖の風景・風俗・詩文を紹介したもので、まるで西湖の案内書のような体裁になっている。元朝では都が北方に移され、繁華をきわめた杭州もかつての姿を失い始めていた。失われたものを懐かしむのは人の情で、特に失ったものがすばらしいものであればなおさらである。これらの書物の出現は、そうした人

情をあらわしているだろう。

遊西湖

西湖に遊ぶ

湧金門外上湖船

湧金門外 湖船上る

狂客風流憶往年

狂客の風流 往年を憶う

十八女兒揺艇子

十八の女兒 艇子を揺かし

隔船笑擲買花錢

船を隔てて笑って擲つ花を買う錢

作者の薩都刺（二三〇八―？）は元の蒙古人。流麗清婉な詩を作

ることで知られる。この詩は、かつて若かりしころ目にした西湖でのようすを詠んだもの。おおらかでありながら恥らいを含んだ少女の姿を巧みに描写しているとして高く評価される。第一句は蘇軾の

詩に「湧金門外 已に春融く」とあるのに基づく。また、同じく北

宋の晁冲之（一〇五三―一一一〇）の「人の江南に遊ぶを送る」に

も「湧金門外 紅塵を断ち、衣錦城辺白蘋を着く」とある。晁冲之

は「錢塘七述」という格調の高い文章で杭州を紹介し、蘇軾の称賛

を得ている。蘇門四学士の一人でもある彼は師匠に対する尊敬を込

めて、この句を作ったのであろう。後世の詩人はこの「湧金門外」

の四字を余程気に入ったのか「湧金門外 是れ西湖、堤上の垂楊

尽く蘇を姓とす」（宋・宋本）、「湧金門外 柳 金の如し、三日来

らざれば緑陰を成す」（元・貢性之）「湧金門外 柳 煙の如し、西湖頭 水天を拍つ」（明・于謙）など、数多くの類似表現を容易に見つけ出すことができる。その中でも、薩都刺のこの詩は、田汝成の『西湖遊覧志餘』に「天錫（薩都刺）の西湖の六絶句、天然の逸致、織尖の一路に墮ちず」と評されるように、素直で平明な表現のなかに繊細な作者の心を感じさせる。

このように、後世の詩人たちは、特定の場所を詠むにあたって先人の作を積極的に利用し、故意に真似ているのである。先人の語句を利用した詩を読んだ者は、背景にある先人の作をも思い浮べることになる。それによって詩の幅が広がることになるのである。ただし、西湖での作品に限って言えば、やや先人の作品が意識され過ぎて、作者自身の顔が見えづらいという印象を免れない。

先人の作品を読めば西湖の風景が浮ぶのは当然であるが、この時期になると、風景を見れば先人の作品が浮ぶようになる。つまり、西湖の風景とそこで詠んだ先人の作品とは、まったく切り離せないものとなり、作られた詩も、明らかに模倣あるいは剽窃といっても差し支えないものまであらわれ、作者の個性は失われる傾向にあった。

明代になっても西湖に魅了された者は引き続き多くあらわれた。西湖への憧れは時代が下るごとに高まり、明末に至ってその頂点に

達する。特に西湖を訪れたいと願ったのは袁宏道（一五六七—一六一〇）であった。模倣の多い西湖を題材とした詩文の中では、彼の作品は充分個性が出ていると言えよう。

袁宏道は、西湖を訪れる前の二年間、呉（今の蘇州）の県令として毎日仕事に追われていた。あまりの煩雑さに、彼は何度も辞職を願ひ出て、ようやく許されて西湖に遊ぶことができた。次に挙げるのは、「西湖 一」あるいは「初めて西湖に至る記」と題する文である。仕事から開放されて憧れの地を訪れることができた喜びが述べられている。

従武林門而西、望保俶塔突兀層崖中、則已心飛湖上也、午刻入昭慶、茶畢、即棹小舟入湖、山色如娥、花光如頰、温風如酒、波紋如綾、纒一挙頭、已不覺目酣神醉、

武林門從りして西し、保俶塔の層崖中に突兀たるを望めば、則ち已に心は湖上に飛ぶ。午刻、昭慶に入り、茶畢りて、即ち小舟に棹さして湖に入る。山色は娥の如く、花光は頰の如く、温風は酒の如く、波紋は綾の如し。纒かに一たび頭を挙げれば、已に覺えずして目酣し神酔う。

遠くから西湖のほとりの岩山の上に建つ塔が見えただけで、もう

心が西湖の上に飛んでいると言う。茶を飲むのもどかしく、さっそく湖に小舟を漕ぎ出し、湖上から目にした風景を四字句の快いリズムで描く。色、香、風の感觸など人間の五感を総動員した表現は、あたかも読者もその場にいるような感覚を抱かせる。続けて、自ら酒に酔ったようだと告白する。作者の喜びが充分伝わり、興奮した息づかいが聞えるようである。袁宏道は完全に西湖の風景に陶醉していたと言っている。

晩明には、他にも張京元（生没年不詳）、李流芳（一五七五—一六二七）、王士性（一五四六—一五九八）など、個性溢れる作品を残した文人たちもいた。彼らの詩文を読むと、確かに個性はあるのだが、逆に奇抜さあるいは文の技巧のみを狙った案内書のようにも見える。

この時期になると、講談の流行や作詩者の数が増大するといった現象が起り、文人だけでなく、民間人までに西湖は知られるようになった。それは国内に止まらず、日本人にも西湖が知られていたということがわかる記述がある。

正徳間、有日本国使者經西湖、題詩云「昔年曾見此湖図、不信人間有此湖、今日打從湖上過、画工還欠着工夫」詩語雖俳、而羨慕之心於海外久矣、

正徳の間、日本国の使者有りて西湖を經、詩を題して云う「昔

年曾て見る此の湖の図、信ぜず人間に此の湖有るを。今日

湖上打従り過ぎれば、画工 還お工夫着くるを欠く」詩語俳

なりと雖も、羨慕の心、海外に於けること久し。

明の田汝成の『西湖遊覽志餘』に見える文である。正徳とは明の

武宗の年号で一五〇六年から一五二一年にあたる。日本人が作ったとされる詩は「かつて西湖を描いた絵を見たことがあるが、このように美しい湖があるとは信じがたかった。しかし今、西湖を訪れると、かつての絵かきの技術がまだ十分ではなかったことがわかった」と解される。詩のあとに続く評語に「言葉は俗であるが、海外の人からも長い間羨ましく思われていたのだなあ」とある通り、確かに近体詩では禁じられている同じ語の繰り返しが多く、「打従」「還」などの口語的表現もみられる。

日本人の好む白居易や蘇軾は、しばしば西湖を詠んでいたことから、古くから日本人が西湖を知っていたのはまず間違いないまい。但しこの詩、逆に俗語が多すぎて本当にこのような俗語まで理解していた日本人がいたのかどうかは疑わしい。

六 清・民国の西湖

明末清初に生きた張岱（一五九七—一六七九）は代々の官僚の家に生れ、若い時から贅沢な生活をしてきたが、明王朝が滅亡してからは、すべての財産を失い山中に暮らした。彼の著書である『陶庵夢憶』や『西湖夢尋』には随所に西湖への思いが綴られる。『西湖夢尋』の序には、

余生不辰、闊別西湖二十八載、然西湖無日不入吾夢中、而夢中之西湖、実未嘗一日別余也、

余辰ならざるに生まれ、西湖に闊別すること二十八載、然れども西湖日として吾が夢の中に入らざる無し。而も夢中の西湖も、実に未だ嘗て余に別れず。

とあり、西湖への思い入れが並々ならぬことを窺わせる。文頭の四字は『詩経』大雅・蕩之什・桑柔にみえる「我生不辰」を踏まえる句で、乱世に生れあわせた自分の悲しみを表わすと同時に、桑柔に詠まれている憂国の情も暗に匂わせている。文の続きでは、「西湖を二度訪れたがすっかり荒れ果てており、昔の面影は跡形もなく、自分の夢の中の西湖の方がよっぽど以前の美しさを保っている。そ

ここで、夢の中で西湖を追憶するように西湖を描き、かつての姿を後世に残すのだ」と述べている。この文にみられるように、張岱は西湖の美しさに完全に没入している。陶酔を通り越してほとんど沈溺と言っている。このような姿は一見、現実からの逃避のようにも見えるが、実は失われた明王朝のための挽歌でもあった。さらに言えば、清朝への抵抗であったかもしれない。実際彼は、明の遺民としての誇りを貫き、清朝からの出仕の誘いを断り一民間人として晩年を過ごした。

彼の「西湖七月半」には、満月の夜、西湖に遊ぶ人々の姿が描かれている。

不舟不車、不衫不幘、酒醉飯飽、呼群三五、躋入人叢、昭慶断桥、嗚呼嘈雜、装仮酔、唱無腔曲、月亦看、看月者亦看、不看月者亦看、而実無一看者、

舟せず車せず、衫せず幘せず。酒に酔い飯に飽き、群を呼ぶこと三五、人叢に躋入して、昭慶・断桥に嗚呼嘈雜し、装仮して酔い、腔無き曲を唱う。月も亦看、月を見る者も亦看、月を見ざる者も亦看る。而れども実は一として看る者無し。

きちんとした身なりもせず、酒に酔いながら群れて大きな声で歌

いながら歩き回り、月を見ようとしめない。西湖はこうした人々で踏み荒らされていた。ただし、張岱は決して苦々しい気持ちで彼らを見ていたのではなく、華やかだった当時の情景を懐かしみを込めて描いているのである。

これ以降、清代の西湖を詠んだ詩は以前とは比較にならないほど益々増えるが、注目すべき作品はあまりない。

尚、ここでは取り上げなかったが、小説の世界でも西湖はその舞台となる。明末から清初にかけて完成したと思われる『金瓶梅』には、西湖に遊ぶ人々の狂態を細かに描く。上田秋成の『雨月物語』にある「蛇淫の性」のもととなっている「白蛇伝」は明代に完成されたものである。嘉靖年間に刊行された『清平山話本』の「西湖三塔記」が最も古い形を残したものでろう。明末の『警世通言』にある「白娘子 永く雷峰塔に鎮めらる」はそれをさらに複雑にし読むに堪える物語となっている。『儒林外史』では、俗人である馬二先生が儒者を気取りながら、西湖附近をあちこち歩きまわり、沈復の『浮生六記』でも、作者自らが西湖の名所を観光巡りする姿が描かれる。明・清の時代には、この他にも、西湖を舞台とする短編小説のみを集めた『西湖二集』や『西湖佳話』までできる。これらの白話小説の流行も、西湖が風光明媚な地として知られ、人々の憧憬の

的となり、西湖を親しみやすくした一因となっている。

結語

日本の近代作家の中にも、幸田露伴、谷崎潤一郎、芥川龍之介、佐藤春夫など西湖に魅了され西湖を訪れた者は多い。³⁾佐藤春夫を西湖で案内したのは、郁達夫（一八九六—一九四五）であった。彼の恋人である映霞が杭州に住んでいたため、彼はたびたび杭州を訪れていたらしい。彼も中国の他の近代文人同様漢詩を善くした。

詠西子湖

西子湖を詠ず

楼外楼頭雨似酥

楼外楼頭 雨酥に似たり

淡妝西子比西湖

淡妝の西子 西湖に比す

江山也要文人捧

江山も也た文人の捧ぐるを要す

塘柳而今尚姓蘇

塘柳 而今尚お蘇を姓とす

起句は南宋の林升の「山外青山 楼外楼、西湖の歌舞 幾時に休む」(臨安邸に題す)に基づき、承句は蘇軾の「西湖を把って西子に比せんと欲すれば、淡粧 濃抹 総て相宜し」(湖上に飲し初め晴れ後雨ふる)に基づき、結句の「姓蘇」は白居易の「教妓楼新た

にして 姓は蘇と道う」(余杭形勝)に基づく。こうなると、ほとんど先人の句の寄せ集めのようにもみえる。

このように、西湖を詠む時、先例を無視した表現は作りづらくなっている。それは、西湖がすでに一種の文学的トポスとなっているからである。おそらくは、これからも西湖を題材とした文学作品はこの桎梏から逃れられないだろう。逆に、それこそが西湖文学の特徴と言ってよいのではなからうか。詩中に「山水も文人の助けを必要としている」とあるのは、文人の作品の助けがあつて、はじめて風景が引き立つのだということだろう。西湖の風景そのものだけでは、心を打つことはないが、風景とこの地を訪れて描いた文人たちの作品とが相俟って始めて美しさが生れるのだ。

これまで見てきたように、西湖は決して手つかずの天然の景観ではなく、人が何百年にも渡って手を加え人工的に造り出したものである。にもかかわらず、多くの人を魅了するのは、過去の文人の目にした風景を自分も確認し、かつての文人と自分とを重ね合わせることで、一つの快感としてあるからだろう。俗であると非難されても、西湖が存在するかぎり、この快感を追い求める人々は決してなくなることはない。

他の景勝地、例えば三峽、廬山、洞庭湖なども西湖と同じように俗化しつつあるだろうが、西湖が他の景勝地と違うのは、ここが

人工の自然、いわば大きな庭園であって、手つかずの自然ではないという点と、この景勝地を描いた作品が群を抜いて多い点である。つまり西湖では風景と作品とが一体となり、それぞれが変化しつつ、常に新たな風貌を提供している。

俗化するのには景勝地としての運命のようなものだが、西湖もその例に洩れず俗化の一途を辿っている。しかし、西湖の整備と訪れた人の作品次第では、これまでにない新たな西湖の姿を造り出すことができるだろう。

〈注〉

(1) 西湖の成り立ちについては、章鴻釗「杭州西湖成因一解」、

王宗濤、顧嗣亮、吳静波「西湖的成因・発育及年齢」が詳しい。

共に『南北朝前古杭州』浙江人民出版社一九九七年所収

(2) 大室幹雄『西湖案内』(一九八五年 岩波書店)

(3) 日本の近代作家のそれぞれの旅行記を挙げれば、「支那漫遊

記」徳富蘇峰、「西湖の月」谷崎潤一郎、『支那遊記』芥川龍

之介、「西湖の遊を憶う」佐藤春夫である。蘇峰、谷崎そし

て佐藤は西湖の遊びに概ね満足していたようだが、芥川は

「西湖は思った程美しくはない。(中略) 浙江の督軍に任命さ

れても、こんな泥池を見るよりは、日本の東京に住んで

いたい」と言い、あまり西湖を気に入らなかつたようだ。もちろん清末民初の西湖は決して美しいばかりの場所ではなかつたろうし、芥川以外の人たちもそれを目にしていなかったとは思えない。訪れる前の期待があまりにも大きすぎたからか、あるいは事実をそのまま表現しないではすまされない芥川の性格のせいかわからない。